特42
915

田宮坊太郎國宗省像
東武忍ヶ岡の園中ふ
同氏墓碑を殘す
辭
今ヨ世
花のよ世の
夢を捨て
くちぬ姿や
昔殘碑

発端て不尾州愛知郡名古屋の御城主徳川三家の一家こゝ此尾張家不仕へて家老職不て二万石を料せし篠宮甲斐守ハ氣量人不

▲極め天ぞれ篠宮家の繼子とあるべき

❶頃より武藝十八番印可と

▲

▣はてゞ
しゞ狡猾
の士不して

故きとこのまゝ

万藝ニ

通ゞ尾州家随一の家臣たり男子二人あり長男源之亟と稱して十六才此人父甲斐と替り忍孝の人不て衆人久つて父の甲斐より用らをけれべ十八才の❶

男子あれバ何不呂ゝく送りしまこと不

神祖より御附家老とゝて安藤帯刀

次へ

つぎ

直次と言ひて

この人前名を彦兵工と名乗り十六才江州姉川の初陣をとげ天正十二年小牧長久手の戦ひは上方無双の大隊長池田勝入齊信輝を討取まつり所々度々の戦争に軍功のあること挙手りきかたしまつも戦争の場数往来の老人にて尾州家に来り

よき折あらハ一刀に討ち果さんと待きに五月五日節句の祝ひとして

ことの外家中の用ひよく雄あつて

直次が登城のあゝを待まうけ日頃のうちに

おりひきれと討てくれどうちとりがたく

篠宮と云者あり

ざれば甲斐守大ひに心中に怒り

つゞき

かくてまが為ふ甲斐守ハ切腹
篠宮家ハ断絶せうよつて妻子
ハそれ〳〵ふ身をまうせ
けゞ茲ふ長男源の亟ハ

十八ゝ成りとより
武藝ふ達練の者ふ
れば四國をめぐり
術行せんと名を
田宮源八と改め住ふもし
名古やの城を跡ふ
藝州ふ至り廣島より乗船
るふ船中ふハ諸國の工商乗
合て各々くまぐふ名産を
まくふ時をうつしけり
何もの藩士ふゆや四人連の士
大ひふ酒を呑ミ居たるゞやゞて

酔ふ乗ゞ
人の出家ふ
むらひ種々の
難論ふ

せま
しがひ人々
大ひふ
氣の毒
がり中ふ一人
の壮士其

つゞき

処より出て先方を止めければ四人の者大ひに知り汝ホがごとき存意ホとはあゝむごたらしに扣て我ガ名論を聽聞せよ

と傍若無人の振舞ホ々の壮士はあきれ取ホたゝざる愚人共出家の手段とり生ホ之さんとは

源八と中武辺術行の者ありと聞シテ何地戌さゝて行き玉ふぞと

なれば不ぬるやつと氣早の士一刀抜く伐て

くるとゝるんの手もふく取て押付のとる三人ぬきつ是ぞく上所戌身と

らくし忽ち四人とるざ倒そその働き凡人ぞ

船中の者大ひにれを賞讃せりしける中

さゝぜんの出家壮士の前ホ進ム出て厚礼戌述其姓名をとゝふる田宮

とゝバ四方をめぐらんとい

出家大いホ悦び幸ひ愚僧ハ伊勢家の苦だい所を預る養言寺

てき林山と申者にて
ゆへバ御身いそ
がぬ旅なれべ
私院ふ
待遠留
下されて
又餓き
はるしも
りと立
けむ
□おつとの妻
をむろへ程とあ
うらぬ処ふ手
跡の指南成
ふしをそき
ハたりしふ
又も林山の
周施ま
て伊
駒家

有べと
夫より
恭ふ上
陸して
行く
そと
あく
丸亀の城下に
着し彼の養
言寺方ふ泊り
居ガ
程なく林山の
周施まして
小仕へ
召り至て
落き役ゐとこ
元来諸術ふ練達
せし者ゆ何ろ
出世の有ゐと奉
行堅く勤ゐ月日と
送るうち源八のたね
成やとしけれべ
誕生とたのしを待居
なる毎年伊駒家の
嘉例まして六月
十五日八幡宮の
次

[ノ記] 境内ニ於テ棒と剣術の仕合ありその勝数ヲ依テ立身させる礼あり源八大ひに喜び備へ出世の時節来りしと其当日を待ちどをしや六月十四日源八も見物共に出きとして境内ヲ至り万事と行せむ一ろの上るく上より下され一所懸命を頂戴いたし

居たるアレ見玉へ田宮どのあれこそ四國の鬼神と云ハれし御当家の師範役堀先生とい〻ふ間ヲ不〻く乗込来るよ一同驚き狼々中ヲ源八へ

さいせんとして不動の如く堀ヲ心中ヲ源八ハ一

明日の仕合心ヲかゝりいつそこの此場よふを殺さんとの心体あるとも

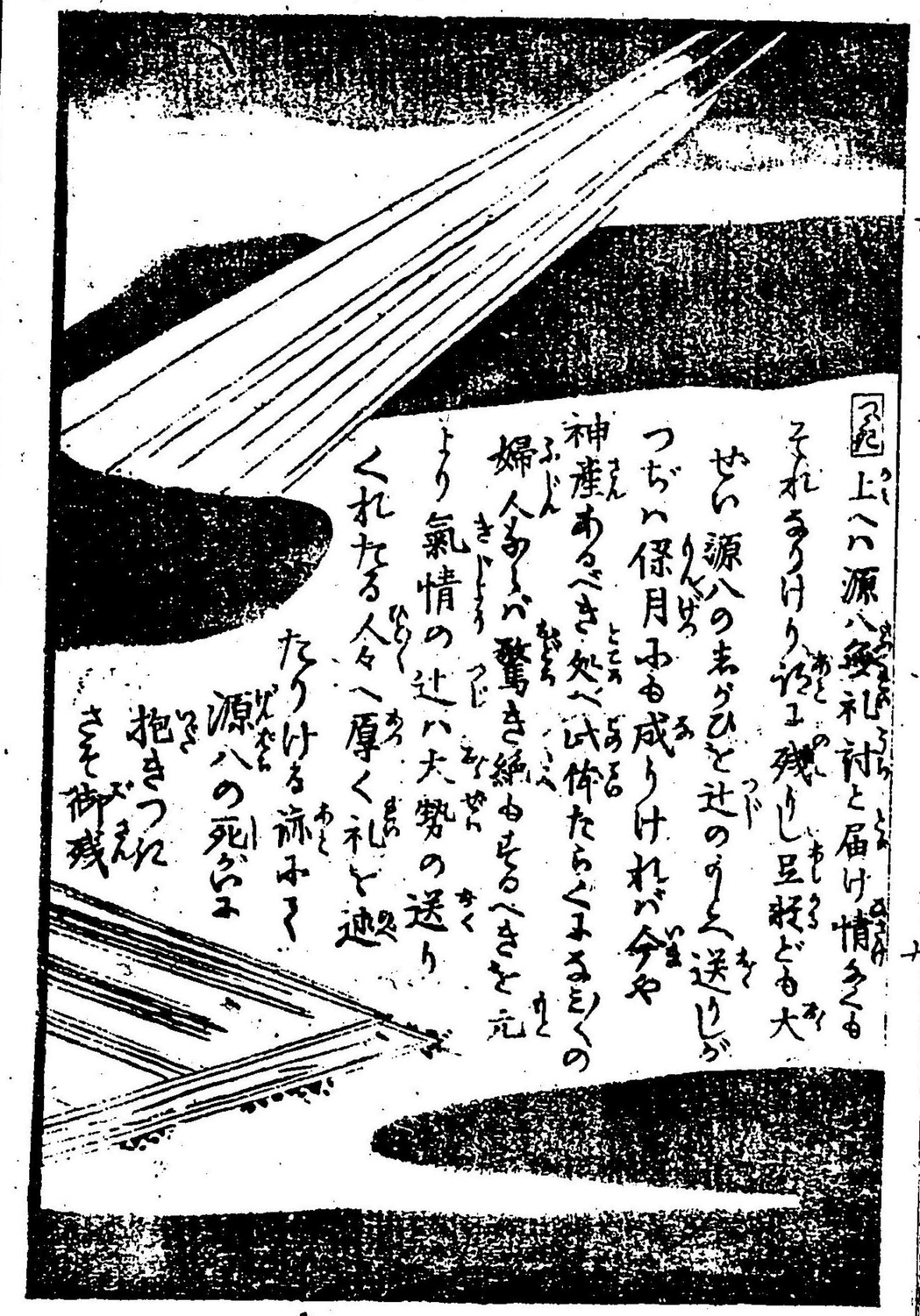
剣道ヲ勝れし事知るべし

源八わらけく飛うる
体を轉して
凄を取て馬を止め
改義いたもうことを当
境内へ御領主といへと御馬
上よくいあらせらるべ
故ふ鳥居の前
ふ下馬札を建
あれーふ御眼中ふ
こへらるやと大音ふ
言りれば堀の面色赤の如く
下郎の高音ニックキあり
かんぬん世とりるべし又
りや源へふ切てかゝる
身を縛て堀の乘

走りて堀へ馬上より大音
をあげ無礼るやつと
抜きうこふ打こうる
源八大ひふ怒り乱心
せーり堀先生身
不肖ふも上の御用
ふく境内と清め
上よりたりる
赤飯と有
かくく
怒り身道よりおこり
のじへやらじと内へ
駒の銅
をたし蹴
久せい何ふい
馬上ふたまる一さ
真坂さまふ落
馬ふしたり親
常いよく

了円カ付けまバ田宮ハ心得ある事なるまバ一刀ぜらりと抜ム
仕さくも出来けれべふたゝび
一くらひ双方
るとゝね勇士
あくヤ
小半
時も弟ひ
源八
イラッテ
此場小切合
たり惜ひ
ス

討込
太刀先
堀が
眉間をとゝまり
たり
此と紀源八
あとハ去り
アイヤ堀氏
眼中ハ血汐入ス
戦ひ思ふまゝ
止め玉へと云けれバ堀ハホット息を
つき左ゝ待居たまバ懐中より
手拭を出し後鉢巻をゝるし右ゝと
源八の運命
つきたりしゝ
神前の木の根ニ風
づき起上らんとおもへ共
其ものハ右ゝり左の眉先
より右の乳の下迄切付アット
いって丈ゝりけり堀ハ大ひニ
悦び発斯なるまバ安心と一刀の
柵をぬぐひ鞘ハ納め境内
を出ゝ已ガ居住ハ立ハ



上へハ源八無礼討と届け情多くもそれまうけり残りし豆粒ども大せい源八の志ひと辻のうへ送りしがつぎハ保月ゐも成りければ今や神産あるべき処へ武体たらくまるとくの婦人あるべ驚き絶ゐもるべきを元より氣情の辻ハ大勢の送りくれたる人々へ厚く礼と迪たりける旅ゐく源八の死ぐいを抱きつれさそ御残

念まくるりつらんもしゐ出子が男子であるバ武藝と点てみ急度敵の源太左エ門を討取て御念と

じまを
とるげきの

▲毎夜水こりをして坊太郎の生長敵ちをぞ祈りける

さて坊太郎こと幼年なれども中く賢く物覚能く林山

内よ悦びふく玉のよふなる男子生まるゝべし子を早く成長させ敵き堀を討せて亡父の霊魂をなぐさめんと源八をばねんごろふ吊ひけり

偖名を坊太郎とつけて五才のとし養言寺林山の弟子となり辻ハ門前ハ花賣として源八のけむり絶立只坊太郎の生長を待堀が首をとると楽ミ▲

下ノ巻へ

一新板二冊袋入 六十番
濃切物

一合本二冊四冊 十二番
袋入濃切物

一中本用文字引 二十番
等法其他

一切付上ノ代紀 百番
実録物

一合本二冊 一番
はうこゑ太閤記

一白縮緬物 三十番

一色の小布 品〻
墨の小布

一かるた 品〻

書物 錦絵 地本 問屋

東京横山町三丁目

辻岡屋文助